

MONTO

《総合政策学部 HP》 <http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/>

特集● 卒業生の動向

CONTENTS

- 特集 卒業生の動向 ■おじゃまします 村木尚文ゼミ/伊藤英之ゼミ
- NEW Intelligence 伊藤健宏准教授/豊島正幸学部長 ■研究最前線 阿部晃士
- 学部ニュース 県立大調整池 ビオトープ大賞/青森県でのエネルギー政策調査/全国大学政策フォーラム I Nのぼりべつ/オープンキャンパス
- 風のMont達 ■天気と数・理① 「降水確率はあてになるの?」
- 入試情報 ■岩手の地形⑥ 「志波城と雫石川」



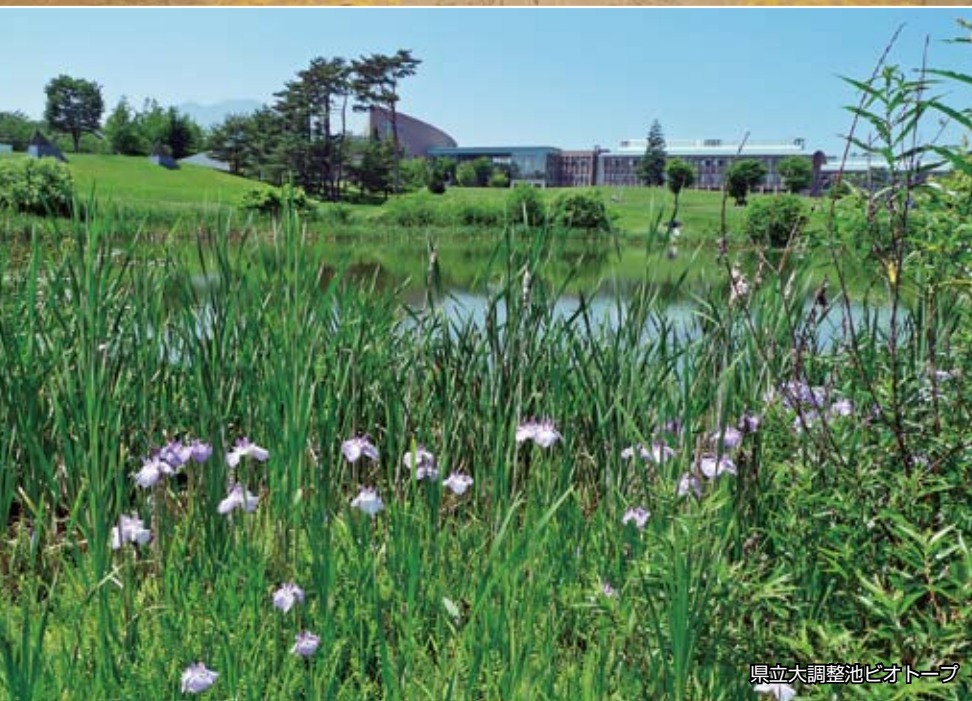
3期生同窓会集合写真



10期生同窓会集合写真



オープンキャンパス(化石グミをつくる!!)



県立大調整池ビオトープ



穴ヶ所村での聞き取り調査の様子



調整池のヨシゴイ

特集 ● 卒業生の動向

これまでの就職戦線を振り返って

平成二四年三月の卒業生で、総合政策学部の卒業生は一期目となり、既に一〇〇名を超える卒業生を送り出している。一期生からこれまでの就職戦線を振り返ってみる。平成三年（一九九一年）三月から始まった「失われた二〇年」（平成不況）はバブル崩壊に始まり、小泉構造改革によって平成一四年（二〇〇二年）一月を底とした外需先導での景気回復により終結を迎えた。一期生（平成一三年度卒業生、平成一四年三月卒業）はその真っ只中での就職であった。この大変な経済状況のなか、就職率九五%と高率の就職を確保した船出であった。その後も平成二二年度生（一〇期生、平成二三年三月卒業）がわずかに九〇%を割ったのを除き、これまでほぼ九〇%台半ばを保っている。

平成一一年からのITブーム（情報通信産業の隆盛）、構造改革に伴う官業の民営化（郵政事業の民営化など）などの産業構造の変革は、そのまま総合政策学部生を取り巻く就職戦況の変革でもあった。また、昨年三月の東日本大震災も岩手県の企業をはじめとして求人への影響が多々あったと考えられる。

本学部生の就職意識を概括すると、一般にのんびりしている（就職に対する意識が低い）と言える。過去の三年生への意識調査から見えて

くるのは、県内への強い就職意向であり、そのなかでも、金融・保険業や公務員への憧憬で、実に三分の一近くが公務員もしくは金融・保険業（地元の銀行など）を希望している。就職先を産業別に見てみると、図1に示すようにこれまでの卒業生の約三分が実際に公務もしくは金融・保険業に就いている（国家公務員と地方公務員をあわせて一〇%、金融・保険業が二〇%）。金融・保険業に就いて多いのが、小売業の一七%である。また、職種としては事務従事者（事務職）も多くは販売従事者（営業職）が多い。

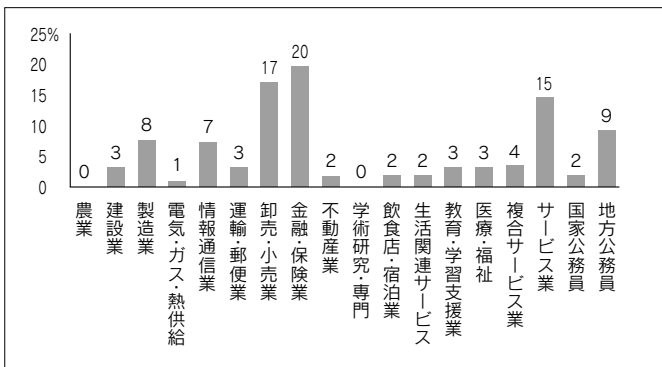


図1 卒業生の業種別就職先 (%)

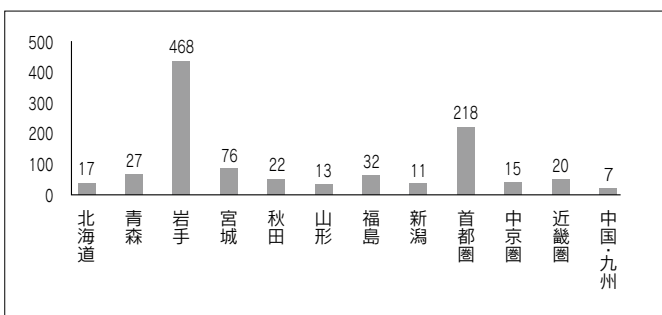


図2 就職先県別人数 (人)

卒業生から

盛岡市役所保健福祉部

佐々木千帆（六期生）



「公務員は生活の基盤を作る部分。そういう使命感を持って仕事をやることに魅力を感じた」と、誇りを持って仕事に打ち込んでいる佐々木さん。しかし、初めの頃は大変だったようだ。

「二年目から担当を持って業務を行うため、何もわからない中で責任を持ち、こなしていくことがプレッシャーでした。また、仕事のペースがわからなかったため、大幅な時間がかかることを想定できず、締切間近にいつも慌てていました」と笑う。今では見通しを立てながら仕事に取り組めるようになってきたようだ。

「市役所では、法律や条例に基づいて仕事をこなしていくため、それらを理解することが大変ですね」と公務員らしい苦労も教えてくれた。

現在は、心身の衰えで生活に介護や支援が必要な高齢者や、特定の疾病により介護や支援が必要な方をサポートする介護高齢福祉課に所属している。「私は介護保険サービスに係る給付事務が主な業務です。日常生活において必要とされる福祉用品の購入に対する給付事務を行っています」。

おこやまじまゆ 村木尚文ゼミ



数学の本当の面白さを教えてくれる研究室

巨大なホワイトボードに次々と数字を書いていく三年生の村上里菜さんを、ここにこのと櫻やかに見させているのは、村木尚文教授。展開されているのは、「数学上げ理論」を用いた賭博ゲーム必勝法の検証だ。よどみなく続くプレゼンに、「数学は苦手なんです」という村上さんの言葉は、にわかには信じられない。専門とする量子確率論では「村木の公式」を発見し、数学の国際会議へも出席する世界的数学者の村木教授。「受験数学ではない、数学本来の面白さを伝えたい」と、微分積分を使わない確率理論など、数学への苦手意識を取り払うべくユニークでわかりやすい授業を行っている。それがさらに進化、いや深化するのがゼミである。提示されるテキストは、数学バズルや論理バズル、なかには数式を使わない数学本というものも。これらを読み解き、巨大なホワイトボードを使って検証を重ねていくのだが「ゼミでは学生が先生になるから」と村木教授。一時間のプレゼンのために事前準備も怠れず、結果として理解が深まっていくのだ。村上さんも「ゼミのたびに数学のすごさを感じる」と微笑む。「数学は遊びの世界にも繋がっている」と村木教授。数学嫌いを魅了する数理世界への入口である。

3期生の同窓会



去る二〇一二年六月二日に総合政策学部三期生同窓会がホテルメトロポリタン盛岡にて開催されました。当日は三期生三八名、教員八名、元教員三名の計四九名のご出席をいただきました。卒業から九年、三〇歳という節目を迎え、また昨年は東日本大震災という災厄から改めて絆というものの意味を考えずにはいられない一年でした。そんな中で開催された同窓会に多忙の中、五〇人近い出席をいただけたことは総合政策学部の絆の強さを感じる会となりました。当日は九年ぶりとは思えないほど和やかな雰囲気となりました。仕事に家庭に各々変わったことや、昨日のことのように学生時代を語る様子を見て、本当に開催してよかったです。これを機に、他期生もぜひ同窓会を開催して、自分達の絆を再確認し、次の一歩の礎にしたいだければ幸いです。(三期生 小原伸明)

大学生活では「一つの方向から物事を考えず、多方面からアプローチすることの大切さ」を学んだことが、今の仕事に生きています。何かをするときには、考え方が偏っていないか常に意識して仕事に臨んでいます。また、物事は基礎の積み重ねでできていくということも大学で学びました。一つの事柄を成し遂げるためには、多くのやるべきことがあると四年間を通して感じたので、どの仕事も一つ一つ丁寧に行おうと心がけています」と語ってくれた。

佐々木さんは、一度民間で働いた後、公務員の道に進路を変更した。「いつでも自分次第、いつだってスタートできます。不安を抱えている方もいると思いますが、違うと思ったら軌道修正をすればいい、焦らずおろかな気持ちで大学生活を楽しんでください」と心強いメッセージを寄せてくれた。

盛岡グランドホテル

高橋真梨さん (六期生)



「入社前から目標としていた婚礼企画部に昨年からの異動になり、私にとつて大きな夢が叶いました」と嬉しそうに語る高橋さん。この部署に異動する前には、三年半で一四〇組の結婚式をプランニングから式のサポートまで担当し、現在はウエディングに関する広告宣伝活動と新商品の開発を担って、いきいきと仕事に取り組んでいるようだ。

「ホテルがお客様にご提供するものはモノではなく、時間」で、特に結婚式は決して安価ではない高額商品。さらに、お客様の人生にとつてそれは「最高に幸せな日」として、生涯記憶に刻まれるもの。だからこそ、私た

ちの業務に一切失敗は許されぬ。むしろそれが当たり前と覚えて向き合感をもつて取り組んでいて、常に緊張感をお手伝いさせていただくことができるかどうか、とても大切になります。だからここで「良い結婚式ができてよかった。担当が高橋さんでよかった」とそんなふうにならなくていい。この仕事をしていて一番のやりがいです。お客様からいただく嬉しい言葉は、大きな原動力になります。

この職業を目指すうえで、大切にしたいことが三つあったそうだ。①仕事をしながらも、自分自身がさらに女性らしく磨きをかけられるような職に就きたい、②たくさんの人と触れ合う職に就きたい、③自分自身で、何かを創り上げてみたい。特に三つ目の「何かを創り上げたい」というのは、学生時代に自分の地元の地域活性化に向けたボランティアに参加したときに芽生えた。このときに新しいものを創る楽しさを教えることができた。現在、ウエディングを「創る」という仕事をしている原点が、学生時代のこの活動だったようだ。だからこそ「勉強も遊びも一生懸命に、興味を持ったことには積極的に行動してほしい。そこにきっと、自分にプラスになる良い発見があるはずですよ」と後輩たちに向けて力強く語ってくれた。

APCOMユニケーションズ

鶴田千佳子さん (七期生)



東京のIT系企業に勤める鶴田さん。実はすでに転職を何度か経験をしたという。携帯電話

やパソコンなどウェブサービスの企画・運営や出版など「ProC(個人顧客向け事業)」の仕事や、企業にウェブサービスを提案する「ProB(企業向け事業)」の仕事を経験してきました。その中で、さらに自分の可能性を広げたいと考え、新規事業を推進する部署が新設された会社に転職しました。経験豊かな人たちに囲まれたこの会社で、新規事業ができるということが、今の自分にぴったりだと思っています」と話す。ウェブ関係の仕事でも個人向け・企業向け両方を体験できたことで、視野が広がり、さまざまなことに取り組めるようになったようだ。

現在は今までの経験を生かしながら、パソコン、スマートフォン、出版など幅広いジャンルで仕事をしているという。

「もともと企画を考えたりするのが好きだったので」と言う。一つの企画を作り上げて、形にしていることが面白く、「仕事の中で、普段の自分の生活の中では出会うことのない人たちと一緒にプロジェクトを進められることに喜びを感じます」。

大学時代は環境政策講座に所属し、さまざまな野外調査を体験した。「その中でも八幡平実習が本当に楽しかったです。実践中心の実習の時間はどれも印象に残っています」と笑う。「大学生活では、サークルでも授業でも、仲間と一緒に取り組む楽しさ・大変さを沢山教えてもらったように思います」と語る。

現役の大学生に「とにかく、今を楽しんで下さい!楽しんで分、社会人になってから自分の支えとなり、エンジンになります」とメッセージを贈ってくれた。

おじゃまします

伊藤英之ゼミ



防災教育に必要なのはコミュニケーション力

研究室の机の上には、寒天やシロップ、ゼリー型など、菓子作りの材料が散らばっている。「シロップは冷やした方がいいよ?」「あ!カマボコ買ってくるの忘れた!」。この光景の会話、防災教育が研究テーマの伊藤英之准教授のゼミでは珍しくはない。テーブル上のゼリーやグミは、翌月に釜石で行われる防災フェアで使う。実験材料なのだ。火山をはじめとした自然災害のメカニズムと防災について、身近な材料を用いての教育・普及活動に取り組み伊藤准教授「直接の地域貢献が基本」と、小学校への出前授業や子ども復興会議など、さまざまな現場へと出かけて行く。もちろんゼミ生も同行し、子どもや大人達とも実験やワークショップなどで交流。ジオパークを中心とした沿岸復興に関する研究にも着手した。だから、自ら積極的に考え、コミュニケーションやフィールドを苦手としない学生は大歓迎」と伊藤准教授。そんな行動派ゼミの面々、岩崎幸大さん、小松平健介さん、岩崎駿さん、阿部希望さん、大和田晴美さんは県内各地へと出かけるなかで、自らのテーマを探っている。災害心理や災害メカニズム、あるいは教育技術や災害時の食事etc.。現場での見聞から、新たな研究が始まるのだ。

年金問題、介護そして少子化…。 経済学の視点から社会の問題を考察

伊藤健宏 准教授



◆プロフィール

山形県生まれ。経済学博士。青山学院大学経済学部経済学科、東北大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学の後、石巻専修大学経営学部に着任。山形大学人文学部と東北学院大学経済学部の非常勤講師を兼務。平成24年より岩手県立大学総合政策学部准教授。経済政策と社会保障を専門分野とし、年金制度、介護問題、少子化を研究テーマとする。日本経済学会ほか所属。

研究室の棚の一面に設けられた「ドラえもん」コーナー。さまざまなノベルティやオマケの類い、コレクター垂涎のレアグッズもずらりと並んでいる。この四月、本学部に赴任した伊藤健宏准教授の貴重なコレクションの一部である。「昔からドラえもん好きというのもあるし、何よりドラえもんは日本の家族の姿をよく映していると思います。のび太やしずかちゃんが一入った子だったり、祖父や祖母を大切に描き方など、現代にもあてはまる設定でしょ。」

年金問題に介護、そして少子化。三〇年以上前に描かれたドラえもんの世界に、伊藤准教授は自らの研究テーマとしてこれら課題を見いだす。専門の理論経済学は、さまざまな数式を使って社会や経済現象を説明する学問だ。数学論理を用いる経済学とは、どういふもの

か。伊藤准教授が挙げた例が「消費関数」だ。消費がどういふふうに行われるかという決定要因を定式化したもので、ケインズの理論をはじめさまざまな仮説がある。アメリカでは戦後、より精度の高い消費関数をめぐっての議論すら起こっているという。「消費の仕方は時代や考え方によって変わる。政策を立てるにも、地域に密着しすぎればそこでしか効き目のない政策になってしまうが、普遍性を保つため、一定の「距離」をおいて見ていくべきなんです。」

この距離感が重視されるのが、年金そして介護問題なのだと言う。「もちろんお年寄りには尊敬すべき存在であり、一定の保障は必要です。しかし現役世代の負担が大きすぎれば労働意欲すらそぎかねない。介護も同じで、制度に甘えて負担者の存在に気づかない例もある。給付と負担、相反するものの中でバランスをとっていくのが大事」と伊藤准教授。少子化への関心も、社会保障に対する現役世代の負担を減らす方策を探るうちに取り組むことになった。

「経済学は基本的には人を救う学問」と伊藤准教授は言う。お金イコール経済ではなく、その中には環境や医療、あらゆる問題が関わってくる。環境税を財源とした介護サービス産業への補助政策について論文で考察し、さらに環境税を教育関係へ展開する方策まで考えているのも、「経済学は何でもアリ」というポリシーの表れなのである。「すべての人をハッピーにするのは無理でも、「これをしたらこういふふうによくならすよ」という帰結を示したい。そう、ドラえもんの歌にもある『あんなこといいな、できたらいいな』のイメージ」と笑う。

数式で社会現象を考察する理論経済学は一見、冷徹な学問のようにも映る。だが伊藤准教授は「数式も言葉であり、ちゃんと意味がある」と言う。値を入力するとただ一つの値が決まる関数の世界では感情的な議論が避けられ、距離を保ちつつ判断することができるのはい。子どもの頃から身近にいる大人達を客観的に観察し、考え方や行動の違いに興味を抱いてきたという伊藤准教授。理論経済学を選んだのも、自然な流れと言えぬかもしれない。

そんな伊藤准教授、後期授業では「ドラえもんパワを炸裂させようか」と計画。フェル銀行、たぬき財布、漫画のエピソードを散りばめた金融政策の講義で「現実のおかしい部分が見えてくるかも」と楽しそうに笑っていた。

NEW Intelligence

他の知見を取り入れ、自らを磨く。 総合政策学部だから、できる

豊島正幸 学部長



◆プロフィール

理学博士。東北大学理学部地学科地理学、同大学院理学研究科博士課程を修了。大学での助手を務めた後、農林水産省東北農業試験場で10年間研究に携わる。平成10年に岩手県立大学へ着任。日本地理学会ほか所属学会多数、滝沢村環境基本計画づくりへの参画、いわてジオパーク推進協議会学術専門部会長など、数多くの自治体との協働や社会貢献活動にも熱心に取り組む。

「大学とは、教員そして学生という仲間たちが互いに磨き合う『場』。たくさんの人たちに積極的に参加してもらえればと思うし、この場の中で他の人の話を聞く力を養い、かつ面白がることのできる環境を作っていきたいですね。」

今年四月、学部長に就任した豊島正幸教授。平成一〇年、岩手県立大学の創設と同時に自然地理学の専門家として赴任、産声を上げたばかりの総合政策学部を支える教員として数多く学生の社会に送り出した。多様な専門分野を内包する総合政策という概念を岩手県に浸透させる、その役目を実践してきた一人だ。

いろいろな知見に出合い、その中で自らを磨いていく。総合政策学部のこの本質は、豊島教授自身が研究生活の中で体験されてきたとも言える。東北大学では自然地理学を専攻し、

河川地形と人間との関わりという観点で、河岸段丘や扇状地など、水河時代から今日に至るまでの地形の成り立ちとメカニズムを研究した。「根本は大地、そして人間への興味であり、一番近い分野が地理学だった」と豊島教授。それゆえ研究が電子顕微鏡によるミクロな分析へ移るにつれ、疑問を感じるようになったという。転機は農林水産省東北農業試験場へ地形学の研究者として転職した時。当時問題だった窒素肥料由来の地下水汚染に向きあい、地形学的手法を駆使して地下水の流れを予測した。「その頃から、農業が生産以外に果たしている多面的機能が注目され始めていました。農学の世界に地形学的手法を取り入れてもらうことで、私の意識も根本的に変わったのです。」

他分野の知見を取り入れるというプロセスは、次のステージとなった県立大でさらに加速する。生まれたばかりの学部では、カリキュラムにもまだ試行錯誤の余地があった。「例えば『市町村合併』というテーマでも、行政学や財政学のみならず、社会学、地理学など各々の分野のアプローチがある。教員同士がセッションし、いろいろな知見を集めて初めて全体が見えてくるのです。テーマや手法など、授業をやりながら考えていたと振り返る開学時の経験が、研究者として人間として、豊島教授自身の世界を広げてくれたという。

総合政策学部のように多様な専門分野をカバーする学際的な学部の必要性は、三〇年以上も前から唱えられてきた。しかし学問の世界が必ずしもその方向を推進してきたとは言えない。「現実社会のさまざまな問題に立ち向かうには、専門性が求められるのは確かですが、どうしても必要となるのは、横断的な視点で全体をみることです。『総合政策学部』には学際的なコーディネーターとしての役割が期待されています。」

総合政策学部における学際的な取り組みは震災復興研究や地域づくりなどの分野です。に始まっている。豊島教授は、そのような「場」に教員のみならず、学生も参加するような仕組みや雰囲気をつくっていききたいと話す。「それぞれが関わっている現実問題を持ち寄り、それぞれの得意とする方法でその問題を切りやみせ、互いに共有する。他の分野への関心や理解を深めていくことができる『場』が、総合政策学部なのです。」

研究最前線

震災からの生活再建に 寄り添った調査活動を

阿部晃士



私の専門は社会意識論、計量社会学です。簡単に自己紹介するときには、「人びとが社会をどう見ているのか。また、それをもとにどのような意思決定をおこなっているのか。意識調査と統計的なデータ分析という手法で研究している」と説明しています。人びとは社会の現実をどうとらえているのか、意識や考え方の違いはどのような行動に表れるのか。また、多様な人びとから構成される社会で、いかなる仕組みがあれば問題解決が可能になるのか。こうした関心が、不公平感や学歴社会イメージに関する研究、ごみ処理の有料化に関する研究、環境意識の形成と環境教育の研究といった、一見ばらばらに見えるテーマの幹になっています。

過去には、1998年に岩手山の火山活動が活発になった頃、開学したばかりの県立大学で、全学部の教員が参加して火山防災に関する共同研究がおこなわれたことがありました。私も、その事務局を担当しながら、同じ地域政策講座の元田良孝先生といっしょにハザードマップの理解度や避難準備に関する調査を実施しました。その後、岩手山の火山活動は収束し、災害に関する研究に携わることはもうないだろうと思っていたのですが・・・。

さて、現在進めているのは、「復興に関する大船渡市民の意識調査」です。前号(MONTO第27号)でも短く紹介しましたが、直接被災されていない方々も含めた大船渡市民全体から抽出した2,000人を対象に、生活状況や復興への意識を調べているものです。大船渡市災害復興局の協力を得て、同じ対象者に継続して何度も調査をする「パネル調査」の第1回を2012年12月に郵送でおこないました。多くの方々にご協力いただき、有効回答は1,239票、回収率は61.2%となりました。この調査は堀籠義裕先生(公共政策学)や茅野恒秀先生(環境社会学)との共同研究ですが、今回は、その調査の背景や、特に私が担当している部分の分析経過を紹介しましょう。

われわれの研究が参考にした調査のひとつに、阪神・淡路大震災(1995年)からの復興過程に関して、兵庫県と京都大学防災研究所がおこなった大規模なパネル調査があります。神戸市及び兵庫県南部の地域において、震災6年後から10年後まで、生活再建の過程と意識変化を追跡したのですが、この調査のなかで、生活復興感(生活の見通しや種々の満足感)が扱われています。それによると、時間の経過とともに全般的に生活復興感が高まっていく一方で、人による違い(分散)が拡大していったことや、人とのつながりや重要な他者との出会いが「震災を乗り越えた」といった主観的な認識

につながり、それが生活復興感を高めることが明らかになっています。

大船渡市での調査に関して、私は、現在の生活に関する不安や(2年後の)生活の見通しについての分析を進めています。不安をやわらげたり、明るい見通しをもつことにつながる要因はどのようなものでしょうか。阪神・淡路大震災の調査を参考に、人とのつながりの影響も考えてみました。図1を見ると、青で示した肯定的な回答が多くなっていますが、赤で示したように否定的な回答も若干見られます。さらに分析してみると、ここでの肯定的な回答には生活の見通しを明るくする効果があり、逆に、否定的な回答は不安感を高めていることがわかりました。そのほかに、仮設住宅や「みなし仮設」の方々の不安感が高いこと、世帯収入が多ければ不安感は低く見通しが明るいこと、相対的に漁業・水産業の方々の不安感が高く、生活の見通しが立っていないといった結果も出ています。震災から9カ月後の時点で、生活条件の違いから被災地の方々の意識にいくつかの側面で差が生じていること、やはり人とのつながりが意識に影響していることがわかります。

先行研究の規模に比べれば、本当に小さなプロジェクトです。東日本大震災による爪痕の大きさを考えると、自分たちに何ができるのかと思うこともありますが、被災された方々の生活再建の過程に焦点を絞り、息の長い調査を続けていこうと考えています。

なお、調査の速報(主な集計結果のまとめ)は、2012年3月に、回答者の方々と及び大船渡市にお届けしてあります。学部ホームページからもダウンロードできるようになっています。

(本学部准教授 計量社会学)

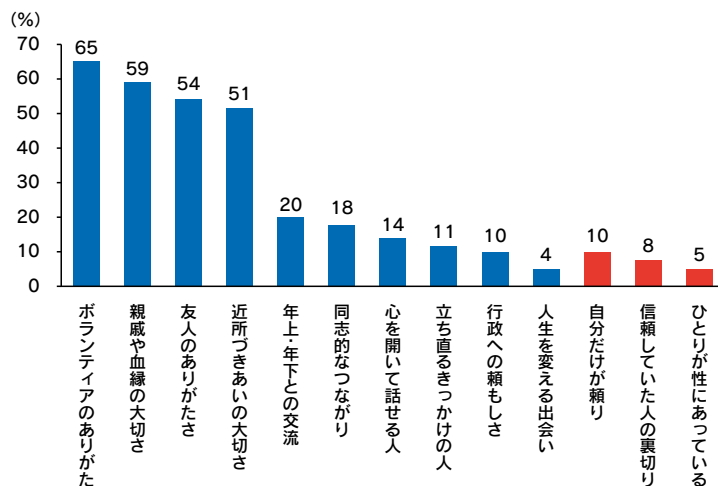


図1.震災後の人とのつながりの変化(複数回答, N=1231)

県立大調整池 ビオトープ大賞



調整池

県立大の入り口アーチをくぐると、右手に第一調整池がある。この池が平成二三年度ビオトープ大賞（日本ビオトープ協会）を受賞した。しかし、最初からビオトープとして造られていたわけではない。

学内には他に調整池が三つあり、大雨に備えて普段は空っぽだが、この一番目の池だけは本学の景観を構成するものとして開学当初から水が満たされていた。当時、周りにはレンギョウやユキヤナギなどガーデニング的な植栽が施され、すっきりとした人工的な景色だった。

すみずみまでよく計算されていたが、同時にそれは変わらないうちに維持するのが難しい景観でもあった。水辺や湿地に自然に入り込んでくる植物たちをこまめに取り除きながら、栽培植物だけをきれいに残すにはかなりの手間と経費を要する。そのようなコストをかけずに池としての姿を保つには、むしろ「ほとんど何もしない」という選択肢もあるのではないかと提案した。景観計画の中に初めから含まれていた「自然と人工の調和」というテーマに沿って、少しだけ自然寄りの案である。その結果二〇〇三年頃から池のほとりに入ってくるクサヨシやガマ、ヤナギなどの植物を刈り取らないことになった。一方、池の西側



調整池のカワセミ

は芝生草地として入念な刈り込みが従来通り続けられ、年々増えてくる池の野生植物とお互いが引き立て合う姿になった。その合間には過去に植栽されたハナショウブ、タニウツギ、アジサイなども生き残って咲いている。

この池の水。実は多くが学内のトイレ等から排出される汚水を地下の処理施設で浄化した後に流し込んであるものである。環境基準は満たしているが、やや富栄養の気味がある。水辺の植生が多少は浄化に役立つているが、それでも追いつかず、夏にはアオコが発生する。そこではアオコによって水を攪拌し、アオコを抑えるために昨年風車を導入した。今ではすっかり景色にとけ込んでいる。

ギンブナ、モツゴなどの魚が生息し、それをねらって多くの鳥類（三八種以上）が訪れる。そこにはパン、ヨシゴイ、カワセミなど、いわてレッドデータブックの掲載種が八種も含まれ、営巣・繁殖しているものさえいる。人工的に造られた池としては驚くような変貌である。これは水辺の植生を厚く、豊かにしたことが大きな要因だろう。

しかし、自然は常に変化する。これからの観察を続け、最小限の手を加えながら、大学の財産として永く維持していきたい。（平塚明・本学部教授 生態学）

青森県でのエネルギー政策調査



（茅野恒秀本学部講師 社会学）

九月三日から七日にかけて、「エネルギー政策と地域社会」をテーマとする調査を青森県で実施しました。この調査は法政大学社会学部を中心に一九七二年から行われてきたもので、日本の社会学の中で指折りの歴史を有する社会調査プロジェクトです。茅野研究室は、昨年から法政大学と合同で調査を実施しています。

エネルギー政策の大転換が見込まれる中、青森県には原子力関連施設が立地しており、かつ再生可能エネルギーの賦存量も豊富です。これら施設の運営状況や原子力関連施設の安全対策、国からの交付金や地元雇用などの地域振興策、地域資源を用いた内発的発展のあり方などの政策課題について、行政機関、首長や議員、エネルギー事業者、商工会、NPO、新聞社、医師、弁護士など二七件の聞き取り調査を実施し、県内各地の施設を視察しました。

エネルギー政策の焦点にある地域における第一線の当事者への調査は緊張感にあふれるものでしたが、他大学の学生から刺激を受けつつ、得難い経験ができました。

全国大学政策フォーラムINのぼりべつ



第七回全国大学政策フォーラムINのぼりべつが二〇一二年八月二十八日から三〇日の三日間開催されました。テーマは「任んで良かった・住みたくなるのぼりべつ」を求めてです。長引く不況や少子高齢化など、わが国を取り巻く環境は悪化しています。これらは地方都市においてもさまざまな影響を与えています。登別市も例外ではなく、各種事業所の廃業や倒産など地域経済の疲弊化とそれによる雇用の悪化、人口減少など厳しい事態となつています。今年はこのらの課題を打開するために登別に集った七大学、一チームが知恵を絞りました。幼子からお年寄りの居場所づくりや交流を視点とするまちづくりのアイデアや、地元の資源を活用した起業化や各年齢層が働く場の創出の妙案が各チームから提案されました。

私のゼミは温泉の廃熱・排水を利用したハウス栽培と、その果実を活用したスイーツ作りによる地域活性化を提案しました。惜しくも入賞はできませんでしたが、審査員から高い評価を得ました。次の機会には入賞できるようにさらなる努力をしたいと思えます。（田島平伸・本学部教授 行政学）

オープンキャンパス



実験室開放の様子

七月一日に高校生向けのオープンキャンパスが開催されました。当日は二〇〇名以上の高校生が大学を訪れ、熱気に包まれました。

総合政策学部では、午前中に学部説明会および模擬講義を行いました。模擬講義は「復興の総合政策学」「エネルギー政策のゆくえ」という、震災以降話題となっている事柄について取り上げました。

学部棟のイベントでは、研究室ツアー、在学生によるよろず相談、実験室開放、サイエンス・カフェ、授業・研究成果のポスター展示などさまざまな企画が行われ、多くの高校生に来てもらいました。特にサイエンス・カフェの一角で行われた化石グミをつくるコーナーでは順番待ちができて、大変盛況でした。

学部棟のイベントでは、多くの在学生が学部棟の魅力について、高校生に語ってくれていたようでした。

このようなイベントはオープンキャンパスと、秋に行われる大学祭があり、ずいぶん機会を見つけて、足を運んでいただければ幸いです。（高大連携担当）

風のモンター達

“一步” 踏み出した時の楽しさを 積み上げ、自分の世界を広げてきた。

3年 細沼由羽紀さん

中学の時、自分なりの学習法を見つけた細沼由羽紀さん。高校ではトップの成績をキープし、「やりたいことが見つけられそうだから」と総合政策学部を選択した。1年の秋にはスタッフとして参加した「就活サブリ塾」で、かつてない充実感を体験。「昔から人見知りだったけど、一步踏み出した時の楽しさを知ることができた」と微笑む。

そんな細沼さんの次の“一步”は、出身地で行われている青少年育成事業「カシオペア100km徒歩の旅」の学生スタッフに名乗りを上げたこと。小学4年から6年の児童が県北4市町村の100kmを4泊5日かけて歩く旅を、準備段階からサポートした。大人でも過酷な1日平均20kmを、保護者なしで歩く子どもたち。最大の難所は折爪岳の登坂で「スタッフも泣き出すほどつらい」と細沼さん。それでも歩ききった子どもたちは、ゴールで保護者と抱き合って喜ぶ。それを見ながら細沼さんは、自分自身の成長も実感するという。2年目の今年は



「ずっと同じ場所にいるのは合わない。誰もいない場所で、新しい何かを積み上げてみたい。」
そう話す永廣昌孝さんにとって、札幌から移り住んだ岩手は紛れもない“新天地”となった。1年生の時ソフトウェア学部の先輩から誘われたのは、なんと会社経営への参画。「ビジネスに興味があったし、学生に機会を与えるという企業姿勢にも共感できた」と、

団長補佐として、自ら声をかけて集めた9人の大学生スタッフとともに参加した。

イベント企画・運営サークル「I☆CAN」も、サブリ塾で知り合った先輩と立ち上げた。県内学生のネットワークづくりを目的に、社会人を招いて座談会を開催し、昨年10月には大通りのイベントで総勢150名以上の学生によるさんさ踊りを披露した。「社会から見たら遊びかもしれないけど」と笑うが、震災の年、岩手の若者の元気をアピールする大きな機会になったことは確かだろう。

ほかにもある。岩手の農畜産物をPRする「いわて純情むすめ」として県内外のイベントに参加し、さらに本学のキャンパスアテナントとして高校生への対応にも取り組んでいるのだから、忙しいことこの上ない。「でもまだ、やりたいことは見えていません」と細沼さん。日々自分の世界が拡大していくなか、当然ながらそれまで見えていたもの、考えていたことも変わっていく。

「挑戦という言葉は好きじゃないし、私自身そんな大胆な人間じゃない。日々、コツコツ積み上げてきた結果が今の自分なんだと思っています」。

ビジネスへの参画、人との出会い。 挑戦を積み重ねた先に広がる未来

4年 永廣昌孝さん

「ずっと同じ場所にいるのは合わない。誰もいない場所で、新しい何かを積み上げてみたい。」

「ずっと同じ場所にいるのは合わない。誰もいない場所で、新しい何かを積み上げてみたい。」



大学の客員教員と学生有志が創業したICTソリューション企業、株式会社イワテシガの常務取締役役に就任したのである。

会社では得難い経験をした。常務として出

会ったのは、大学生活では関わることのない大人たち。「これから会う人が、言葉遣いや所作にまで気を遣うべき人物かどうかを判断する力もついたし、話の進め方などもわかった」と、身につけたスキルも多いようだ。それを生かす形で先輩らとともに学生団体「FLAG」を立ち上げ、発想したビジネスプランの事業化を目指してさまざまなビジネスコンテストへも参加。企業内留学というべき新しい人材活用プランは、「雇用という社会問題に目を向けた発想」と審査員から評価された。

行動する一方、「いつも内面について考えている」とも。小井田ゼミで、ゲーム理論を通し利害関係の分析に取り組むのは「人の内面に通じる部分があるから、社会に出ても役立つ」と考えているからだ。そんな永廣さんから見た岩手の人は、よくも悪くも優しく控えめ。「僕は自分がいいと思ったものは周りにも勧めるタイプ。いかに周りを巻き込んでいくかがテーマなんです」と笑う。

今年4月には台湾で行われたシンポジウムでスピーチをこなし、8月には知り合いのインド人企業家の橋渡しで研修にも出かけた。動くことで広がった人脈とチャンス。「将来は専門知識同士を結びつけるビジネスで、イノベーションを起こせるかも…」と、描く未来も大きく広がっている。

天気と数・理① 降水確率はあてになるの？

佐野嘉彦

「あ〜した天気になあれ!」とって下駄を足で空高く投げあげる、子供たちが下駄をはいて遊んでいた頃にやっていたお天気占いの遊びです。下駄が表を向いたら晴れ、裏を向いたら雨、明日も晴れればいいな、と思っていたのでしょね。下駄には鼻緒というのがあって、湿度が高いと鼻緒が水分を含み重くなるので裏返るのだ、なんて嘘か本当かわからないような説明を後付けする困った人もいたりして、言い伝えは単なる遊びから、形態、意味を変えて伝わっていくようです。さて、この下駄を硬貨(コイン)に替えてやってみましょう。コインを投げて、表なら晴れ、裏なら雨。どうでしょうか、これで明日雨が降るかどうかを決めてみては? 何? そんなことで決めてはダメだ。晴れ、雨は確率50%で出てくるのではないか、天気予報があるだろう! あれ、明日は降水確率が50%と言っているぞ。

この降水確率50%って、どういうことなのでしょう。雨がたくさん降るのでしょうか、それ

とも少ないのでしょうか。傘は持っていったほうが良いのでしょうか、それともいらぬのでしょうか。

最近、この降水確率についてはいろいろな機会に説明されていますので、今さらという感がないこともないのですが、少し考えてみましょう。

天気予報では、降水確率を発表するときに必ずこういう表現をしているはず。「1ミリ以上の雨が降る確率は・・・」。どうですか、気象予報士の方は、こういう言い方をしているはずで。ここで、おや、1ミリ以上の雨って結構幅広いじゃ? と気づいた人はなかなか鋭いです。1時間に50ミリも降るような非常に激しい雨でも、3ミリ程度しか降らない弱い雨でも、すべて1ミリ以上です(当たり前やないか! と突っ込まれそうですが)。つまりは、降水確率からは雨量は判断できないのです。では、降水確率はどういう考えればよいのでしょうか。

例えば、気温、風、気圧、天気図(気圧配置)など、さまざまな条件が似通った日というのは、限られた期間、夏とか、8月とか、の中で30年間くらいみれば結構あるはずで。さあ、そこで同じような日が30日あったとします。そのうち、ある地点で雨が降ったのが15日あったとすると、次に同じような条件が整ったら、その地点では降水確率50%と発表することになります。つまりは、ある条件に対して、今まで雨

が降ったかどうかの確率を示しているだけなのです。

では、傘を持っていく方が良いのかどうか、これは降水確率からどのように判断できるのでしょうか。

実は、この判断は、個人に任されるのです。判断の材料を示しているだけです、傘がいるかどうかは気象庁の判断ではありませんよ、と言っている数字でもあるのです。80%の確率が高いから傘は必要な、は誰でも考えそうですが、50%、つまりは五分五分となると、人によっては、傘はかさばるし持っていくのは嫌、という人と、半分でも雨が降る可能性があるのなら、用心に傘を持っていこう、雨に濡れるのは嫌、という人が出てきそうです。30%でも用心深い人は傘を持っていくかもしれません。

整いました。「気の弱いパートナー」とかけて「降水確率の判断」と解く。すべては「あなたまかせ」です。苦しいけど・・・さのっちでした。

(本学部教授 気候・気象学)



入試情報

平成二五年度入試は募集人員、受験科目等について大きな変更点がありません。まず、募集人員についてAO入試が五名から若干名となり、推薦入試が二五名から三〇名に増えました。受験科目の変更は次の表の通りとなっております。後期日程の「面接」は廃止されました。詳しくは募集要項をご覧ください。

	センター試験					総合問題	小論文	計
	外国語	国語	数学	社会	理科			
一般前期	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	250	550	
	3教科3科目から得点の高い2教科2科目を利用			2教科2科目のうち得点の高いほうを利用				
一般後期	100	100	100	100	100	200	700	

※一般前期・後期ともセンター試験の五教科五科目の受験が必要です。
(入試委員会)

岩手の地形⑤

東北自動車道を盛岡インターチェンジから南へ進むと、左手に大きな櫓や土塀が見えてくる。古代の城柵を復元した志波城古代公園である。高速道路からよく見えるので、いつか訪ねてみたいと思っている人も多いだろう。

志波城は古代の陸奥国の北縁を守る拠点として、西暦803年に征夷大將軍・坂上田村麻呂によって造営された。その規模は一边840mの正方形で、陸奥国府の多賀城の規模を上回る。しかし、この巨大城柵は造営から10年ほどで放棄され、約10km離れた徳丹城に移転した。短期で志波城を放棄した理由、それはこの土地に志波城を造営した理由と関連する。ここは当時の雫石川に近く、北上川や雫石川を経て各地に通じていた。しかし、利便性をもたらしてくれた雫石川は、予想以上の暴れ川でもあった。志波城は頻繁に洪水被害を受け、造営から10年と経たずに移転を決断した。

志波城が洪水に苦しめられた歴史は、現在の地形や水田の配列にも残されている。図1右は、1950年頃の空中写真から推測した旧河道（河川の痕跡）である。水田の区画整備が進んだ現在でも（図1左）、わずかに昔の河川の名残をとどめている（赤矢印）。写真で曲線に見える場所に行くと、そこは低い段差になっている。現地を訪ねたなら、段差の上に立って、足下の水田を河川が流れていた昔の風景を想像してみたい。

1200年後の現在、雫石川は約2km北へ移動した。図2は、志波城周辺と同時期以降に形成された旧河道の分布である。

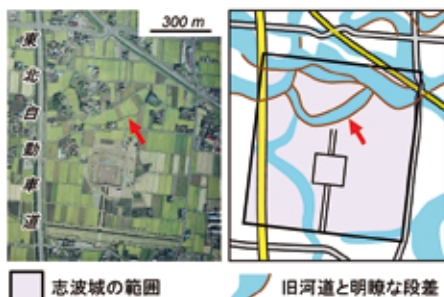


図1：志波城周辺の旧河道
[左] 2005年撮影の空中写真 [右] 1952年の空中写真から推測した旧河道の分布
2枚の図の範囲は同じ。



図2：雫石川周辺の旧河道分布
1952年の空中写真に基づいて吉木作図

多くの住宅や商業施設が建ち並ぶ本宮・太田地区など、広い範囲が志波城と同様の地形にある。1200年前という時間は、地形にとっては「現在」も同然である。つまり、図2で旧河道が縦横に走る範囲には、いつまた雫石川が移動してきても不思議ではない。

しかし、私たちはこれらの土地に街を築いた。この開発は上流の御所ダムや両岸の堤防の存在が前提である。もし、ダムや堤防が無かったなら…？ それは、せっかくの巨大城柵を10年と経たずに捨てざるをえなかった、志波城の歴史が教えてくれる。

(本学部准教授 自然地理学)

志波城と雫石川

吉木 岳哉

とくたんじょう

とくたんじょう

編集後記

▼広報担当になって、初めてのMONTOTOです。結構人念に作られていることを改めて実感。皆さんが興味を持って読んでいただけるよう願っています(よ)▼「今を大切に」という卒業生からのメッセージ。在学生に伝わってほしい。これからは我々は在学生の「一生懸命をサポーターしつづけます(ほ)▼震災後一九九九年になりましたが、今こそ復興を先に進めようという強固な意思が求められていると思います。きつと同窓会に集まった卒業生諸君もそう考えているのは(丸丸虫)▼本号から編集に加わりました。読み応えのある「フリーペーパー」にしたいですね(てんべ)▼本学部の卒業生が千人を超えた。懐かしい顔を時に見せてくれるのは、やはり嬉しいものだ。迷いも喜びも糧としながら歩み続けてほしい(▽)▼総合政策学部を築いて、社会の第一線で活躍する卒業生。学会で招待講演を務め、海外にも雄飛し、企業の経営も務めるスーパー学生。眩いばかりです(T・Y)▼今号からの「研究最前線」では、震災復興に関わる研究を行っている教員にスポットを当ててご紹介しました。地道に行われている研究の様子をお知らせします(な)

●編集スタッフ●吉本繁壽(編集責任者) 岡田寛史・高嶋裕一・見市建・山田佳奈・山本健・島田直明

●イラスト提供●小林紗規子(本学部四年生)

MONTOTO

●【MONTOTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース Iwate Prefectural University
●第28号：2012年(平成24年)10月27日●発行：公立大学法人岩手県立大学総合政策学部
〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字菓子152-52
代表TEL019-694-2000 学部019-694-2700 FAX019-694-2701(学部事務室)
印刷/株式会社社陵印刷 TEL019-641-8000

[URL] <http://www.poly.iwate-pu.ac.jp/>
[E-mail] monto_poly@ml.iwate-pu.ac.jp
[Twitter] https://twitter.com/ipu_poly